

## 建築家 福井を語る



### NICCA INNOVATION CENTER (NIC) 設計者

## 小堀哲夫氏 インタビュー

#### イノベーションを生むミュージアム

2017年11月18日、NICCA INNOVATION CENTER (NIC)にて、株式会社小堀哲夫設計事務所主催のOPEN HOUSEが開催されました。県内外から400名の方々が見学会に参加。小堀哲夫氏、上田信行氏(同志社女子大学現代社会学部現代こども学科特別任用教授)をはじめ、クライアント、設計協力者、施行関係者も交えたトークイベント形式のワークショップ・セッションも同時開催。「イノベーションを起こす人間本来の働き方とは何か」を問うコンセプトを掲げ、社員や地元学生らとワークショップを重ねてアイデアを出し合い設計されました。

**本日の見学会の開催、お疲れ様でした。お忙しい中お時間頂きありがとうございます。**

**今回「働く人々のための空間」を大変重視されたとのこと。実際このような気持ちの良い空間で働かれる日華化学の社員の方がうらやましく思うのですが、一方、外部に対して、福井の街に対して心がけられたことはどんなことでしょうか？**

はい、当初から考えていたことは3つありました。

1つめは、1階をパブリック空間として街へ開放すること。もともとこの敷地は高い塀に囲まれていて、閉鎖的そして化学工場で危険な、というネガティブな印象を周囲に与えていると思いました。今回、敷地周囲には盛り土による緑を配し、歩道を広げるなどパブリックな場を提供していますが、同様に1階も、イベント時などには街に開放できる、使用できる場となっています。クライアントとは、将来的にはコワーキングスペースとして活用できたらいいなと思っています。

2つめは、外装です。通常、研究所とは都市部ではなく、田舎などに建てられるものですが、ここは住宅地。実験配管が見えない配慮が必要であ



ることから、外部に出ざるを得ないそれらを、福井の産物及び日華化学さんに関わる繊維をイメージした2層の格子を組み合わせたスキンによって隠しながら企業のアイデンティティーとしています。

3つめは、芦原街道に面する研究所ということ意識しています。近くの福井大学をはじめ、芦原街道沿いには、点々と学術機関、研究所が存在しています。この芦原街道が福井の「イノベーション街道」の出发点、起爆点となり、研究活動の場がうまれていくといいな、という思いをもちました。

**福井の地に関わられて約3年。福井、福井の人にどのような印象を持っていらっしゃいますか？**

日華化学さんの性格なのか、福井の人の性格なのかわかりませんが、非常にまじめ、という印象です。ワークショップでの宿題なども必ずきちりやってくる。一方、まじめだからこそなのか、引っ込み思案というか、新しいものにチャレンジすることに臆病に感じられました。本当に自分たちがしているの？みたいな。いい意味で気を使ってくれると表現できますが、悪い意味でタコつぼ

に入る、という感じでしょうか。

日華さんの歴史的なフロンティア精神に対し、ワークショップを通じて日華化学さんに入り込んでいったのですが、いい人が多い、このことにもビックリしました。悪く考えない。信じやすいというところがあるような気がしますね。僕たちが嘘をついているわけではないのですが、ネガティブな感情をあまり持たれない。打合せはずっと、ポジティブな感情を持って進めさせて頂けたと思います。

福井の印象的な場所、と言えば、やはり朝倉遺跡です。あそこは衝撃的でした。あれほどの都市が存在していて、なのに一瞬にして消滅してしまったという事実。かつあの狭い土地に繊維の工場や和紙の工場があったり、ベネチアンガラスが見つかったり、とあの当時三国港を通して大陸と交流していたということなんですよ。歴史的には、三国港を中心にして、様々な文化が琵琶湖を通じて京都に流れていました。だから福井は物流の要であったのではないのでしょうか。現代でももの作りや文化の発祥地として素晴らしいのですが、今回福井の歴史を調べていて、「物流の要」であったことにつながった時は、その歴史の証人となる朝倉遺跡はすごいところだと思いました。

井戸も至る所にあります。とても不思議な光景でした。普通井戸は、江戸であっても井戸端会議というくらいで6世帯に1か所、という共同のもので。ですが朝倉遺跡には1世帯に1か所以上あります。水に恵まれているということですが、古代福井は湿地帯だったということもありますよね。日華化学さんでも利用水の98%は井戸水だと伺いました。僕にとっては井戸水を使うという意識がもともとなかったのが、福井に来てこの事実を知って非常にびっくりしました。

そして、大滝神社。霊的な迫力もありますが、建築もすばらしい。かなり複雑な作り物もあります。どうしてあのような大きな屋根がかかってい

るのだろう、という印象です。ご神体を背後にしてあの建築ができた、そして集落、紙の文化ができたわけですが、その歴史は少なくとも1300年前以上さかのぼるんですよ。必見だと思います。

永平寺は、子供のころ毎年のように訪ねていました。父親が大工だったので、寺社仏閣は小さい頃から慣れ親しんだものでした。ですので福井と言えば、昔から永平寺を思い浮かべます。そして東尋坊と水晶浜。出身が岐阜なので、福井には昔からなじみはありました。

また、養浩館にも行きました。川のせせらぎが気に入ったので、今回ランドスケープで水を流すという発想に繋がりました。地下の井戸水が流れています。

人との思い出ですが、河和田のまちおこしイベント「Renew」に参加してきました。このNICではTSUGIというグループの新山さんや中西木材の方々と、県産材を使った家具をワークショップを通して実現したのですが、みなさん面白いキャラクターの方ばかりで、どうやったらこの街の「いいもの」をアピールできるのか、を模索しながら地域密着型のイベントを興しています。このようなイベントをNICの1階を使ってやりたいな、という構想もあります。

**では福井の食べ物ではなにが好きですか？**

へしこです。おいしいですね。しょっぱいのが好きなんです。

最初からばくばくと食べるものではない、と言われるのですが、おいしくておかわりしてしまいます。越前ガニも食べました。

そして日本酒。梵は、おいしいですね。福井でしか買えない、ということも、日本酒の良さですよ。

**福井のいいところのお話をありがとうございました。**

次に小堀さんの建築に対してのお考えなどを伺いたいと思います。

小堀さんの建築のテーマとして、今回の「NIC」、そして日本建築学会賞と JIA 日本建築大賞を W 受賞された「ROGIC」、その他の作品にも共通して、光・風などの自然が挙げられると思います。背景をお聞かせいただけますでしょうか？

自然へのこだわりは多分、先天的なものですね。1つは、田舎育ちということが大きいと思います。岐阜で生まれ育ったのですが、田んぼの風景に囲まれていましたし、山登りも好きでよくしていました。自然の移り変わりや、雲の動き、空気感。これらを感じるによって、新しい発想が出てきたりとか、こういうふう生きようとか、そういうことを考えてましたね。だから自然が人間にどれだけのインパクトを与えるか、ということとは小さい時から意識していました。大学時代もよく北アルプスに登山に行っていました。ここではギリギリの自然も体験しました。そのような経験から、自然というものは人間の気持ちを整えてくれる大きなファクターだと思っています。しかし、今の建築は、高性能・高气密・高断熱が一般的で、自然を感じられない。僕は、温度変化も明るさも、雨であろうが風であろうがなにもわからないような「安定した空間」ではなく、まわりの自然、環境と呼応するようなそんな建築を作りたいと思っています。人間が本来もっている力が発揮されるようなそんな空間です。

ミースが提唱したユニバーサルスペースという建築理念が、「平均性・均質性」と訳され世界中に伝播したわけですが、本当のユニバーサルという意味は、みんながどのような場所でも多様な活動ができるということなのに、均質空間と訳され、ある意味非常に限定された空間が作られ積層され、世界的に広まりました。そしてそれらの建物は地域関係に合わなくなっています。

僕は、その場の、その場にしかない空気みたいな環境をどのように建築に入れ込むか、を実現することでようやくユニバーサルスペースが成立す



ると思っています。つまり、建築と構造と環境、この3つが融合される段階でやっと、20世紀にミースが言っていたユニバーサルスペースが完成する、とそう解釈しています。このような手法でやっていけば、建築というものはどこでも建てられる、という感覚を僕は持っています。

従って「環境」というキーワードが、やはり大きなテーマの1つですね。空気感とか光の移ろいとか、子供の頃に自分が経験した感覚ですが、それらは建物を取り巻く環境でもあり、掴もうとしても掴めないもの。そのような掴めないものによって空間は成立しています。しかも大きなファクターとして。そのような掴めないものを、建築で表現していきたいと思っています。

NIC に関しましては、この土地特有の日射条件を考慮し、井戸水を利用した環境装置を作りました。福井は、日照時間が少ないということで、人々の光に対する意識が非常に強く、光をどうやって取り込むかを考えました。光を入れるイコール熱も入れてしまう、ということに対する解として、地下の豊富な井戸水を利用した空調システムを、また、冬のじっとり重い空気に対しては、デシカント空調、つまり湿度を調整する空調システムを

取り入れています。

どんよりと重く寒い冬、日照時間も少なく、冬が訪れる前の雷など、福井特有の環境があります。しかしこのイノベーションセンターにおいては、閉鎖的なファサードではあるけれどその中に、ぽっかり卵のような温かい広場があり、そこでは社員が楽しく様々な活動をしている。そのようなイメージを持って進めてきました。

#### 大学時代についてお聞かせください。

法政大学の陣内研究室に、大学4年から院の2年間在籍しました。イタリアの都市研究で知られた陣内研です。設計のゼミを選ばずこのゼミを選んだのは、イタリアに興味があったわけではなく、すごく面白そうだったからです。イタリアはじめ、シリアやイスラム圏、アメリカなど、あらゆる国にゼミ生が飛び立ち、遣唐使のように帰ってきて発表していくんですよ。それはもうドラスティックでしたね。地球規模で建築文化に触れることができるのです。僕には刺激的でした。

陣内先生とバーリとレッツェに行ってフィールドワークした時ですが、普通の家にアポなしで訪ねに行くのです。でもほとんど人が喜んで招いてくれました。どうぞ、見てくれよ!という感じです。中に近所の人がいたりすると、うちの方がもっといいからうちにも来てよ!とまた招かれるのです。普通日本では見ず知らずの外国人を絶対入れないですよ。でもその南イタリアの人々は、自分の住んでいる場所が好きだから、ぜひ見てほしいと言います。美に裏付けられた文化があり、その文化の蓄積があるからこそ、人々の、建築や都市に対する愛情があるのだと感じました。

そのような、自分の住む場所が好き、自分の街が好きという感覚はまだ日本にはないかもしれません。やはり、自分の町なんだ、自分の建物なんだ、自分の場所なんだという執着心のようなものがないと、建築文化とか背景というものが成立しないような気がします。

自分の場所、ということになると、例えば今日

の見学会においても NIC のみなさんは快く協力してくれています。今回ワークショップを通して、ここは自分たちの場所なんだ、ということはかなり意識できたのだと思います。

建築には、やはりそういうことが必要だと思います。建築は20年も100年ももちますけど、その建築に対する愛がないとダメですよ。イタリアでは自分の場所に対する愛という背景がありました。でも日本では経済主導になっている部分もあり、物を壊せばいいじゃないとか、儲かる・儲からないという価値観の流れで建築ができてしまいます。そればかりではまずいと思います。イタリアで感じた、自分の家でも教会でも広場でも、街のすべてが私の居場所、という誇りや愛情、そのような背景を作らないと、いい建築というものではないのではないかと思います。

#### 今後やってみたい建築などありますか？

環境というファクターを持ち込むことで、どのような場でも快適な居場所ができると思います。日本の和室の連続のようなイメージです。

不均質、流動的といったテーマの、新しいユニバーサルスペースが、今後いろいろな場所の特殊解や固有種となる気がしています。

(聞き手: 広報委員 板倉満代)

建築家 小堀哲夫 (こぼり てつお)  
小堀哲夫建築設計事務所 代表

1971 岐阜県生まれ  
1997 法政大学大学院 修士課程修了  
久米設計入社  
2008 株式会社 小堀哲夫建築設計事務所設立